

絆 求 め て

4月2日発行

文責 私学振興専門員 久保田学



発達障害について考える

昨年度年間60程の園を訪問させていただきました。その折園長先生や主任の先生とお話をさせていただく中で、発達障害の診断を受けている、又はその疑いがあると考えられる子ども達の受け入れが増えていて、支援に課題を感じているとの話が多く聞かれました。発達障害としてよく耳にする障害として、注意欠如多動症(ADHD)や学習障害(LD)、知的障害、自閉スペクトラム症(ASD)などがあります。この中で自閉スペクトラム症の場合、データにより異なりますが、人口に対するASDの方は、おおよそ20人~40人に1人(2.5%~5%)存在する可能性が指摘されています。今回はこの自閉スペクトラム症について、令和3年度に本協会で開催した本田秀夫先生(信州大学教授)の「発達障害の理解とインクルーシブ保育」を参考にまとめてみました。日々の保育に役立つ内容だと思いますので、参考にしてください。

(1) 発達障害について

- 発達の「異常」とは、「通常」でない少数派であるという考え(多数意見と、少数意見があるのと同じ)
- 発達の異常は、行動面に出る。この行動については大きく下の3つのパターンに分けて考えることができる。

- ①「やらない」異常…他の子がすることをしない
- ②「やる」異常…他の子がやらないことをする
- ③「目に見えない」異常…見えている姿は同じだが、考えていることに違いがある(心では嫌だと思っていながらも、周りにあわせて同じことをしている など)

○親の捉えでは、①>②>③ という順番で課題を感じているのに対し、先生方は、②>①>③の順番で考えている。実は、見えない異常が重大。見えない異常が成長とともに非常に影響してくる。つまり、目に見えない異常について、いかに早い段階で気づき適切な対応をしていけるかが重要になる。

(2) 自閉スペクトラム症について

①自閉スペクトラム症の特徴と医学的診断

| | |
|----|--|
| 特徴 | <ul style="list-style-type: none"> ①臨機応変な対人関係が苦手 ②自分の関心・やり方・ペースの維持を最優先させたいという本能的思考が強い(=こだわり) ③これらの特性が幼児期から見られる(成長に伴いみられるようになるのではない) |
| 診断 | ①②③から、社会生活に支障をきたしている状況がある場合診断名がつく |

○こだわりを持つことは改善できない。大切なのは、何にこだわりを持っているかを見極めること。そのこだわりが命に係わるこだわりの場合は対応するが、安全であり誰も困らないこだわりは放っておく。

②自閉スペクトラム症の観点別特徴

| | |
|---------|---|
| 感覚の特徴 | <ul style="list-style-type: none"> ・視覚的な情報に注意が強くひかれやすい ・様々な感覚過敏や鈍感さがある |
| 感情の特徴 | <ul style="list-style-type: none"> ・予定調和をこよなく愛する ・想定外の事態によって感情が激しく揺さぶられる ・人情論は通用しない(慰めにならないし、納得できない) |
| 苦手な認知機能 | <ul style="list-style-type: none"> ・他者の考えや気持ちを推察すること ・視覚化して想像すること(想像力を働かせる) |
| 記憶の特徴 | <ul style="list-style-type: none"> ・興味のあることは、細部にいたるまで記憶する |

| | |
|-----|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・一度記憶するとなかなか忘れない ・不快な記憶や辛い記憶をフラッシュバックしやすい |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・自閉スペクトラム症の特徴は、3歳位が一番目立ち、その後段々目立たなくなる。しかし、異常が緩和されたのではない。そのため、ほっておくと「二次障害」になる可能性がある。 ・自分がやりたくて始めたことに対して、いつしか「ノルマ」を課してしまう。そのため、やりたい事がいつの間にかやるべきこと、やらなくてはいけないことになってしまう。そして、非常に苦しくなる。 |

③具体的な支援について

○自律スキルとソーシャルスキルを基本として支援することが必要である。

| | |
|----------|---|
| 自律スキル | <ul style="list-style-type: none"> ・自分にできることは意欲的にやらせる ・できない事は無理させない |
| ソーシャルスキル | <ul style="list-style-type: none"> ・できない事を周りに相談できるようにする ・人として最低限守るべきルールを守るようにする |

○幼児期の支援者に多い傾向として、少しでも定型発達に近づけるため、発達促進アプローチ（画一化）になりがちな支援をしてしまうことがある。

○近年の発達心理学では、①子どもの発達にはかなり多様性がある ②色々な領域が同時に、均等に伸びるわけではない→だから、発達促進プログラムは無理！その子に合った支援が必要になる。

○発達の最近接領域を考えた支援を心掛けることが重要である。そうすることで、その子にあった教育が成立し、自己肯定感を高めることができる。

*「発達の最近接領域とは」…その子にとって自力では解決できないが、他者の少しの援助があれば問題解決が可能な水準と考えられる課題

○支援者（保育者）に求められる専門性は、①適切な発達の最近接領域を見つける力（年齢で、到達目標を決めない）、②補完的アプローチを積極的にすること、③しからぬ指導→そのためには、課題を一度に何個も出さない。（1個）そして、完璧を目指さないこと。

○つまり、自然体の子育てが大切である。自然体の子育てでは、「・すぐに伸びそうなことは手伝う ・伸びるのに時間がかかりそうなことは止める ・本人の意欲を減らさない。」この3つのポイントを考え子育てすることが重要である。

(3) インクルーシブ保育について

○インクルージョンの理念は、みんな一緒（同じ（same）ではなく、共に（together）でもなく、そばで（alongside）ということ。

○人は皆多様だから参加の仕方はみんな違ってよい。

○全ての人が居心地よくできるために、時にはその子のためのオーダーメイドの支援が必要（特別な教育上のニーズへの対応＝個別最適化が必要）

○だから、同じ場所と時間を共有していても、やっている事は別、それをお互いが認め合える関係であることが重要である。

○自閉スペクトラム症の子の場合、定型発達の子どもたちの活動の場に参加させただけでは、他児と良好な相互関係を結べない。そこには、保育者の適切な支援が必要になる。

○発達を考慮したユニバーサルデザインについては、発達障害の子にとって有効であると共に、他の子にも有効である。たとえば、下のラインボックス内のような手立てを工夫したい。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・場の構造化…絵カードの活用 ・刺激への配慮…いらぬものを隠す ・ルールの確立…ルールの見える化 ・生活の見通し…絵カードの活用 ・指示の出し方…視覚を利用した提示 ・集中や注目のさせ方 ・合理的な配慮…個に応じたプログラム |
|--|